

佐藤皓也¹⁾, 小林勝法²⁾¹⁾ 順天堂大学スポーツ健康科学部²⁾ 文教大学国際学部

キーワード: 旧制第三高等学校, 競技性, 伝統性, FROG AI-OCR, KH Coder

【抄録】

デジタル人文学という呼称はすでに広く用いられ, 最近ではデジタル技術を用いることで人文科学を探究できる新たな可能性が国内外で論じられている. その一つには, 計量テキスト分析(コンピュータを使った統計的なテキスト分析技術)が挙げられる. この分析の利点はテキストを捉える正確性や説明の客観性が向上することにある. 一方, 課題の一つは従来のテキスト化ソフトにおいて, 旧字旧仮名や特殊なレイアウトを含む史料の文字をほぼ認識できないことにあった. したがって, これまでは手動でテキスト化を実行し, 膨大な時間がかかっていた. それは日本の人文科学において, 史料の計量テキスト分析に関する有効性は指摘されているものの, そうした研究が少ない要因の一つとなっている.

史料のテキスト認識は近代史料(1868-1945)のテキスト化ソフト(FROG AI-OCR)が2022年に開発されたことで解決に向かっている. これによって近代史料でも容易に計量テキスト分析が可能となった. こうしたデジタル技術の導入は上記の利点や新たな研究視点を提供するために必要不可欠である.

そこで本研究の目的は, デジタル技術を武道史に導入する試みの一つとして, 武道関係史料の計量テキスト分析を実施し, 武道史研究の新たな方法を提起することにある.

武道関係史料は, 武道史の先行研究(佐藤, 2021)で用いられた『嶽水會雑誌』の剣道部記事を対象とした. それは先行研究の史実認識と解釈による主観的分析と本技術による客観的分析を対照し, 研究の妥当性や新たな視点を検討することができるからである. 計量テキスト分析は, 自動的に語を取り出して分析する段階(分析1)と, 注目したいコンセプトを取り出して分析する段階(分析2)に分けて実施した.

分析1において, 剣道部記事は大会や試合に関する話題が多く, 九つのグループに分類できることが新たに判明した. また, 年代ごとの出現語をみると明治30年代から剣道の競技スポーツ化を志向し, 大正一桁代には大会での優勝を目指すようになったことが明らかとなった. この結果は先行研究の史実認識と解釈を裏づけるものである. 分析2では, 競技性と伝統性というコンセプトを設定し, 二性質の時代推移を計量的に把握した. 1899-1907年はすでに競技性の方が高く, 伝統性とともにより高く1899-1903年にかけて上昇した. ところが, 1907年には伝統性が競技性よりも高くなった. 1908-1910年では, まず競技性が高くなるものの, 1909-1910年は伝統性の方が高くなった. 1911年以降は, 競技性と伝統性の割合は入れ替わることなく, ほぼ競技性が高くなった. 各時代推移は武道史の流れと合致する部分が多くあり, 新しい研究視点の一つとして提起したい.

以上, 分析1はこれまでの成果を支持する結果であったのに対して, 分析2では新たな発見があった. 武道史研究における計量テキスト分析の活用性は史実認識の担保と研究視点の発展にある. したがって, 本研究はデジタル技術を用いた武道史研究の重要な基盤になると位置づけられる. 今後, 本技術を用いることで武道史をさらに深く, 客観的に探究することが可能となる.

スポーツ科学研究, 20, 1-15, 2023年, 受付日:2022年12月30日, 受理日:2023年3月15日

連絡先:佐藤皓也 順天堂大学スポーツ健康科学部

〒270-1695 印西市平賀学園台1-1

k.sato.it@juntendo.ac.jp